

孫とおばあさん

私たちの高校時代の同級会では、「子と孫とどちらがかわいいか」「孫は母方につくというのには本当か」など、たわいない孫論議が交わされるようになった。

私の場合、小学二年の時に母に死別、母は若死にだった。母方のおばあさんは「母のいない子だから」と、私たちきょうだい五人をただかわいがるだけだったから、いちずにおばあさんを慕った。半年もしないで継母まははが来たので、おばあさんの足は遠のき、幼い者たちは二重の悲しさに耐えねばならなかった。

でも、さすがおばあさん、孫たちの誕生日には必ず訪れ、母の霊前にぬかずき、生前の娘に語るよう孫たちの成長を報告するのだった。お茶一杯も出さない継母の険しい目付きをがまんしながら。アメリカ兵の沖縄上陸で壕中爆死するまで、そのことを一度も欠かさなかったらしい。

「お前たちのお母さんは生きている時から神様だった」といろいろ語るおばあさん。母のこととなると全身で聞く子ら。あきもせず尽きることなく、一つことに結び合う

祖母と孫。ああ、少年の日生きる勇気をそこから幾度も汲んでいた母なる泉よ。祖母は貧しすぎて孫にさえ与えるものは何もなかった。でも、祖母と共にいると、私は豊かさに包まれていた。

婦人少年室長だった池田信子さんの幼児時代の思い出話を付け加えよう。「祖父母には一緒に寝るほどかわいがられた。夜半目覚めると母の悪口をいつている。泣き出した私は母のもとへ走った。うしろに、あの子寝ぼけているよ、という祖母の声があった」と。

結局、どんなにかわいがっても孫は母親のもの、そして、その母方の祖父母により強く引かれるものだろうか。

(一九八二年九月十三日)